

シンポジウム③

「漢方と中医学の架け橋——日本漢方の症例や治療法を中医学の目で解釈して、有効性や普遍性を抽出」

注目ポイント

日本中医学会は中医学を日本の医療に導入し活用することを使命としているが、日本で行われている漢方医学との接点を探り、融合の道を模索することも大切と考える。本シンポジウムは、今学術総会の総合テーマの副題「東アジア伝統医学の発展の可能性」を受けて、日本の漢方医学の症例や治療法、方剤運用法を中医学の目で解釈して、有効性や普遍性を抽出することを目的とする。

座長は常日頃日本漢方を世界の視野から考察されている安井廣迪氏。各演題は、まず漢方医学の黄金時代の江戸期の漢方の医案から学ぶことを平馬が抽出する。矢数芳英氏には、昭和の漢方の大家矢数道明師の臨床を中医学の視点で解析いただく。加島雅之氏には昭和から現代に至る漢方を評価し、その普遍的価値を剔出していただく。中医学と漢方の比較に長年取り組んでこられた戴昭宇氏には中医師から見た日本漢方を評価していただく。

日本漢方の遺産と現代の姿を中医学の視野から分析してその発展性を探り、中国医学をルーツとする東アジア伝統医学の共有財産となる可能性を議論したい。

(平馬直樹記)

シンポジウム③

矢数道明の臨床

矢数芳英

矢数医院、東京医科大学麻酔科

【はじめに】矢数道明は、その生涯において日常診療の記録を継続して行ってきた。そしてこれらを臨床報告という形で、学会発表だけでなく様々な雑誌に投稿し続けてきたため、現在でもそのほとんど全てを、誰でも読むことができる。何故、休むことなく最後まで投稿を絶やさなかったのか？かつて、90才を過ぎてもなお臨床報告を続けている姿を見て、その理由をたずねてみたことがあった。その「答え」は意外なものであり、これは「本シンポジウム」にもつながっている。はじめにこの理由について述べてみたいと思う。

【五苓散と頭痛】頭痛に五苓散を用いる時、雨の前の頭痛に対して、その有効性が高いことが知られている。これは、灰本元先生と名古屋百合会の研究グループが行った臨床研究¹⁾によって明らかにされた。五苓散の有効性と最も強い正の関連があったのは「雨の前に症状が悪化する」であり、オッズ比は16.3と高く、統計学的に有意であると報告している。気圧低下によって誘発される頭痛に90%という高い確率で五苓散が有効であることを示した。

五苓散を頭痛に用いることは、中国では行われておらず、日本漢方の経験に基づくものである。この話は以前に安井廣迪先生より教えて頂いた。この時、矢数道明が臨床で五苓散をよく用いており、著効例を数多く発表していたことも同時に教わった。その考察では、五苓散の古典的な徵候である、「口渴、尿不利、浮腫」などとは無関係に有効であるとしていた。ここにも、前述の「答え」の一つがあるということをお話したい。

【症例提示】矢数道明の臨床報告の中から、日常の診療でも遭遇するであろう「高血圧症」、「不正出血」という2つの疾患をとりあげ、弁証を試みる。中医学的な考察を加えることで、その有効性や再現性を抽出できれば幸いである。

【参考文献】

- 1) 灰本元ら：フィト、Vol.1、No. 3、1999、8-15